



社会活動センター・シナピスは平和を実現する使命に向けて生きる人びとを応援します

月刊シナピスニュースレター

年間テーマ ～戦後 80 年、平和の巡礼者として、祈り、行動しよう～



1月17日早朝、
たかとり教会でおこなわれた
阪神淡路大震災の追悼式。
神様が見守ってくださっているかのような
光に包まれました。

地上でもっとも小さいといわれている種子、それがシナピス(からし種)です。
イエスは神の愛がすべての人におよび、互いに尊重し合い、
愛し合うように願って平和の種をまき、
やがて鳥が巣をつくるほどの大きな木になると約束しました。

巻頭言

聖年の恵みのひとつ

部落差別人権委員会担当

クラレチアン宣教会

ながさき そう
長崎 壮



2025 年は希望の巡礼者の通常聖年でしたが、大阪高松教区は巡礼指定教会が多いため、私は早々に巡礼手帳を 19 のスタンプで一杯にすることをあきらめ、その代わりに一年間に 19 の霊的な体験をしようと決意しました。

そのひとつ、平和旬間のときにはこのような出来事がありました。

広島市では毎年原爆投下の日に平和記念式典が行われますが、この平和記念式典にクラレチアン会に縁のある、さいたま教区さいまいちのひとりの司祭が隔年で青年たちとともに参加し、その行き帰りの途中にある今市教会いまいちで宿泊するのが慣例となっていました。

コロナ禍も終息した昨春、数年ぶりにこの平和巡礼を計画した司祭から今市教会に泊めて欲しいとの連絡がきました。

今市教会の信徒の方々の様子を見ると、自らの体力の衰えや、コロナ禍で腰が重くなったこともあるのですが、司祭ふたりを含む 9 名を泊まらせてもてなすことができるか不安を感じているようでした。

私の方も、暑さの盛りに青春 18 切符を利用してやってくる平和巡礼団の苦労を考えて、代表の司祭に「枚方市ひらかたにあるクラレチアンレジデンスのほうがシャワーが何機もあるし、宿泊の設備も整っているので、次回からはそちらの方をお勧めしますよ」との提案を用意していました。

ところがこの提案を切り出す前に、このさいたま教区の司祭から、「宿泊に便利な設備の整った場所よりも、苦労が伴った方が青年たちにとって巡礼になるし、これまでの今市教会の信者さんたちとの絆を大切にしたいので、これからも今市教会にお世話になりたい」と言われ、私は心が動かされました。今市教会の信徒の方々にもこの巡礼団の意向を伝えたところ、皆が気持ちよく「今後もさいたま教区との友情に応えましょう」ということになりました。

巡礼というのは訪れる側だけでなく、迎える方にとっても恵みが注がれます。

この恵みの体験は待降節の黙想にも役立ちました。マリアとヨセフが宿屋をすべて断られたことを聖書は伝えますが、私たちも訪ねてくる人、私たちを頼りにしている人々にどれだけ寛大に心を開いているかを日々問われているような気がします。



正義と平和全国集会(仙台)の分科会報告

事務局 おおもり ゆうじ 大森 雄二

《午前の部》: 講師: たかせ 高瀬つぎ子さん(福島大学共生システム理工学類特任准教授)

テーマ:「福島原発事故の実相を伝え続けていくために！」

原子力発電は、基本的に火力発電と原理は同じで、50年代の古い技術によってたつものであること。福島第一原発から放出された放射能はチェルノブイリ原発事故の50分の1から100分の1の量でしたが、それでも広汎な地域に避難指示が出されたこと。避難計画・区域が次々に変更されて振り回される被災者に「逃げたらいつ帰れるの」と問われ、「1~2週間ではない」としか答えられなかった辛さ。放射能の専門家として、汚染状況の現地調査に入る時、人が住んでいる地域ではあまり厳重な防護服を着て行かないようにした思いを語られました。

国からの予算がつけば調査が続くという状況と、調査結果が表立って公表されることなく、WEBの奥深くにしまい込まれている現状を特に危惧されていました。

事故から14年が過ぎ、当時の子どもが青年となり親となる中で、フクシマの記憶の継承に意識して取り組む必要があること。実は炉心溶融というぎりぎりの状況を脱出して今があること。地震大国で原発を稼働する限り、事故のリスクと共存していること。30年で廃炉完了としたロードマップは変更を余儀なくされること。「アンダーコントロール」という安易な言葉や、減税や税制優遇と引き換え(=国民負担の増加)に「原子力の最大限活用」へ向かう政府の姿勢に、解決できないモヤモヤとした気持ちを被災者が抱えて暮らしていることを、遠くの人、都会の人にわかってほしいと締めくくられました。

《午後の部》: 講師: ひのまさみ おながわ 日野正美さん(女川原発の避難計画を考える会)

テーマ:「再稼働女川原発の危うさと未来への道筋」

津波がもう1.8m高かったら、全電源喪失に至っていたであろうという話は衝撃でした。2号機の建屋には1130カ所もひびが入り、建物の剛性(外部から力を受けた時どれだけ変形しにくいか)が大きく低下したにもかかわらず、7100億円をかけて安全対策工事を行い、2024年10月には運転が再開されました。この間、再稼働の是非を問う住民投票条例の制定案は二度(初めに市民が請求、次に野党4会派が提案)にわたり県議会で否決されました。

東日本大震災で女川原発は、福島第一原発よりも強い揺れ(636ガル)に見舞われ、それは当時の基準値振動(580ガル:想定される最大の揺れ)をはるかに超えるものでした。今回の再稼働に伴う安全基準では、基準値振動を1000ガルまで引き上げたと説明されていますが、老朽化する原発の耐震性が上がる不思議を指摘されました。

そして最大の問題点は、避難計画の実効性です。想定される19万人弱の住民の移動で、大渋滞が発生し、30km圏内を脱出できないこと。車両や身体を除染を行う予定の検査場所や、避難先を知らせる受付ステーションの開設が難しいこと。避難のためのバスと運転手の確保の責任が曖昧なこと。結論として、被曝前提の逃げさせない(られない)避難計画であると厳しく指摘されました。

入管と闘い続けた「難民」の物語

フリーライター おおもと あさみ 大元 麻美



健康だった頃の
ムスタファさん

母国に帰ると命の危険がある難民認定申請者などを強制送還する事例が、昨年から急増している。在日39年のパキスタン人、ムスタファ・カリルさん（62）もそのうちの一人だ。法務省の出入国在留管理庁（以下・入管庁）の施設に収容されて13年目にあたる昨年12月17日、突然母国に強制送還されてしまったのだ。

ムスタファさんは、パキスタンで16歳から政治活動を始め、カシミールの独立運動に参加。20回以上も逮捕され、拷問を受けた。

命の危険を感じたムスタファさんは1987年に日本に逃れてきた。その後39年間で一度だけ、帰国したことがあるが、ムスタファさんの帰国を聞きつけた警察が探し回っていることを知り、すぐに身を隠し、再び日本に逃亡してきたのだ。

— 難民としての誇り —

「難民の該当性」は高いが、入管は、ムスタファさんが何度、難民認定申請をしても、「母国に帰っても何も問題ない」と断定した。それに対して、ムスタファさんは在留特別許可を求めて裁判に訴えたが、敗訴となった。

ムスタファさんは、自分が難民であること、また難民であるという自らの“自尊心”を持ち続けるために、「在留特別許可を得て入管収容施設を出る」ということに徹底的にこだわった。そのことを理由に「仮放免」を拒否したのだ。

結果として、東京出入国在留管理局（以下・東京入管）と茨城県牛久市にある東日本入国管理センター（通称・牛久入管）の2カ所で通算12年以上も収容された。

多くの難民認定申請者が、無期限の長期収容に耐えられず、心身共に“壊れて”いく中、ムスタファさんは、「在留資格が得られるまで」と、入管と闘い続けた。

やがてムスタファさんは、入管にとって“目障りな存在”となって、“攻撃”の対象となっていた。

収容中のある時、ムスタファさんは左手首を骨折したが、ギプスで固定してもらえず、ただ厚紙を当てて包帯で巻くだけの処置だったため、左手が不自由になった。歯の痛みが激しく、入管外の歯科通院を何度申請しても却下。ただ鎮痛剤の座薬を渡されるだけだった。この鎮静剤がきっかけで、健康状態が悪化していくことになる。

入管の何年も続く「いじめ」への抗議の意味で、2016年ごろからムスタファさんは固形物を食べないハンガーストライキを始めた。80キロあった体重は半減し、貧血とめまいで、入管内を移動する時は車いすが必要になった。しかし、彼は「僕の心は絶対に負けない。他の外国人を励ますためにも、僕は諦めない」と言って、耐え続けた。

— いじめの延長にあった強制送還 —

そんなムスタファさんにも「心が折れた」瞬間があったという。

2020年12月、突然、10人ほどの職員がムスタファさんの居室に入ってきて、1時間かけて荷物検査を行った時のことだ。

職員たちは、ムスタファさんの歯ブラシなどを触った汚れた手で、ムスタファさんの心の支えである「バイブル」と「コーラン」を1ページずつめくり、最後にそれらを廊下に放り投げたのだ。

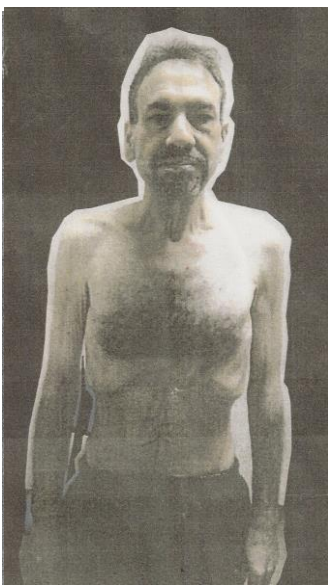
そして畳の裏まで点検し、違反行為がないと分かったら、廊下に出した荷物をまた部屋に投げ込み、室内をぐちゃぐちゃにしたまま立ち去った。

大きなショックを受けたムスタファさんは、精神的ダメージのあまり、数日間眠ることができない状態に陥った。重篤な健康状態のムスタファさんは、一人で歩くこともできなかった。医師からも航空機の搭乗は不可能と言われていたにもかかわらず、入管は医療関係者を同行させて、彼を強制送還した。

ムスタファさんは、2005年のパキスタンの地震で、家も家族も失っている。強制送還され、空港に置き去りにされたムスタファさんは、今、どうしているのだろうか。安否が気遣われる。

入管のこうした、あからさまな国際法に違反する行為、またその他の、入管庁と日本弁護士連合会との間で交わした合意への違反行為。強制送還する場合は、裁判をする権利を保障するために、「入管は強制送還予定日の2カ月前に弁護士に知らせる」という合意事項があるのだが、ムスタファさんの担当弁護士が、彼の強制送還予定日を知らされたのは、その1週間前のことだった。

支援者らが彼の強制送還をやめるように訴えた署名を集めて、入管庁に届けたのが昨年12月16日。その翌日にムスタファさんの強制送還が遂行されている。



こうした入管の非人道的な強制送還におびえる難民認定申請者の数は相当数に及ぶ。

寄留者を助けることはキリストの時代から行われていたことだ。私たちは今、国内に逃れてきた難民たちの命を守るために力を合わせて踏ん張るしかない。

難民支援団体の現状は、どこも難民同様“瀕死の状態”に陥っているが、祈りながら頑張ろう！

右上の写真は、健康だった時のムスタファさん。入管収容により80キロあった体重は半減し、別人のような風貌(左の写真)になった。

シナピスニュースレターVol115号(12月号) 2ページのつづきです。「発達障害児者」を「発達症(障害)を持つ人々(大人も子どもも)」に変えて書きました。(以後「人々」とします)

A. 多動症(障害)を持つ人々への配慮:

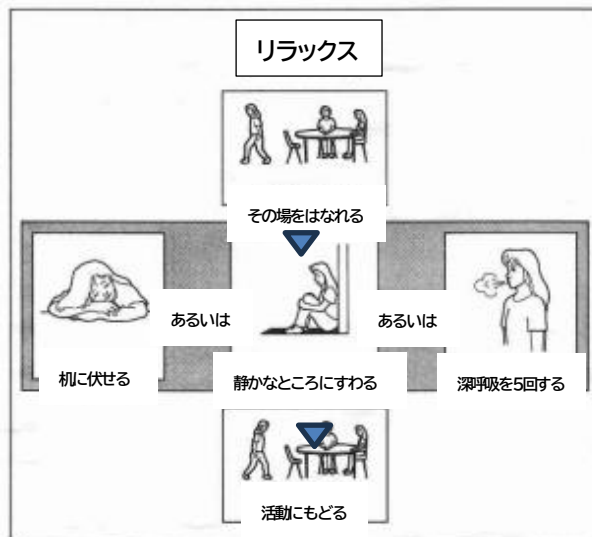
多動には、感覚の多動と運動の2種の多動があります。

① 感覚の多動への配慮について

AD/HD:注意欠陥多動症(障害)及びASD自閉症スペクトラム症(障害)を持つ人々、さらにHSP(感覚過敏症)と呼ばれる人々が世の中に20%はいます。眩しい光、激しく動くもの、大きな音、かたい椅子、ザラザラした布、窮屈な服、大きな音、強い匂いが苦痛です。そのため、じっとしてられず逃げ出します。

(配慮)→「今から大きな音が出ます」と、予告をお願いします。「30秒で終わります」と、終了時間も教えてください。少しなら我慢できます。

※聞こえにくい人のために大きな音量が必要な場合は、是非、赤外線や磁気ループによる音声補助システムの利用をお願いします。小さな音量が良い人には小さく、大きな音量が良い人には大きな音量で、それぞれにあった音量で聞くことができます。



(※ノースキャロライナ大学の資料から)

② 運動の多動への配慮について

人は寒いと震えます。小さい子どもは、じっとすることが困難です。動くことが必要です。緊張すると動いてしまう人、高齢になって無意識に動いてしまう人もいます。神経が動くことを求めています。動くことが必要な人びとだと理解してください。

(配慮)→配布物を配る係や侍者など、動いて良い役割を担当させてください。よく動く人々は、ミサに与る前に充分に体を動かしておくことが大切です。

B. ASD自閉症スペクトラム症(障害)を持つ人々をはじめこだわる人々への配慮:

① 同じ場所が落ち着く人々への配慮について

(配慮)→もし、空いていたら座らせてください。何かの理由で使えない時は、事前に座れない理由を説明してください。

② 急な予定はとても不安に感じます

(配慮)→ミサ終了の時間など、できるだけ変更がないようにお願いします。変更が必要な時は、変更の理由と時間などを事前に説明をお願いします。

C. 大きな声を出したりする人々への配慮:

① 発達症(障害)を持つ人々に限らず、泣いたり声を出したりする人々への配慮

声を出す人々とその家族が、聖堂から出て行くのをよく見ます。その人々と家族が優先してミサに与るようにしたいものです。

(配慮)→その人々なりのお祈りをしていると考え、やさしく受け止めてください。

② 動き及び声が気になる人(気が散って祈れないと感じる人)への配慮

(配慮)→声を出す人々となく、気になる方が泣き部屋でミサに与ってください。

D. 発達症(障害)を持つ人々とそのご家族と仲良くなりたいと願っている人から:

◎「ミサが終わったらすぐに帰らず、一緒に分かち合いませんか。」

(配慮①)→先に述べたA~Cの配慮ができていることが第1の条件ですネ。

(配慮②)→ミサの間、わかち合いの間、お子さんを預かるボランティアがいれば嬉しいです。

※講演会、学習会では、託児が多く用意されています。

中南米をアメリカの「裏庭」にしてはいけない

事務局 おおもり ゆうじ 大森 雄二

1月3日（現地時間）、米軍がベネズエラで起こした軍事作戦には言葉を失いました。

一国の大統領夫妻があつという間に拉致されて、裁判のためワシントンに移送される。深夜の作戦で、当然、多くの犠牲者が出ました。これが国際法違反の軍事行動で、主権を侵害する侵略行為であることは明らかです。

軍事作戦の様子と合わせて、公海上の船舶を爆撃する映像が、積荷の説明や船員の消息には何も触れずに繰り返し流されました。アメリカはマドゥロ大統領が「麻薬密輸組織の親玉」と主張します。一方で、国連薬物犯罪事務所のピノ元事務局長は、この密輸組織自体がでっち上げで、「ベネズエラはキューバと並んで、麻薬対策の優等生」とはっきり述べています。

作戦終了後の記者会見で、トランプ大統領は石油の利権を強調しました。そして「アメリカがベネズエラを運営する」という、何様のつもりなのか、違和感しかない言葉を発しました。

世界最大の石油埋蔵量を持つベネズエラは、70年代半ばに「石油産業国有化法」を制定し、外資系石油会社から資産の接收を始めました。この経緯を、トランプ大統領は「我々の石油を盗んだ」と批判しています。

80年代にはアメリカが、小さな政府の実現の名の下に石油市場の開放、民営化、規制緩和などの新自由主義改革をベネズエラ政府に進めさせ、ベネズエラ国民を犠牲に巨額の利益を得ていたことは、欧米のメディアが伝えない歴史です。

1998年の大統領選で「貧者の救済」を掲げて当選したチャベス大統領は、石油の富を国民に平等に分配することを約束し、スラムの解消、医療・教育の無償化、農民への土地の分配、失業者への職業訓練など矢継ぎ早に実施しました。

社会主義化するチャベス政権に対して、当然アメリカは転覆工作を開始します。一方のチャベス大統領は、反米の姿勢を鮮明にして「テロとの戦争」に走るアメリカを批判する急先鋒となり、中南米諸国に共感を広げます。

20年以上続いた政権転覆の試みの中で、武器を使わない戦争と言われる経済制裁は、食糧輸入の減少による慢性的な飢餓、医療や公共サービスの低下など、厳しい影響をベネズエラ国民にもたらしました。800万人の国民が国外脱出した大きな理由がこの経済制裁で生きていけなくなったからと言われています。

メディアが伝えるように、喜び踊るベネズエラ国民がいるのは事実でしょう。でもだからと言って、今回の軍事作戦を認めれば、強い国が力にものを言わせて小国を支配した100年前の世界に逆戻りです。

ベネズエラのこと、石油も含めてベネズエラ人自身が決める。この当たり前を「中南米は裏庭」と言っただけでアメリカは壊しました。次号からは、ベネズエラ以外の中南米出身の友人たちに、自分の国のこと、アメリカへの思いを語ってもらい、お届けしたいと思います。

ガザの和平 ―― 絶滅か、追放か、の選択

シナピス運営委員 にしぐち 西口 のぶゆき 信幸

彼は叫ばず、呼ばわず、声を巷に響かせない。
傷ついた葦を折ることなく、暗くなってゆく灯心を消すことなく、
裁きを導き出して、確かなものとする。
イザヤ書 42:2-4

イエローラインの中で静かに、ゆっくりと、しかし着実に進むイスラエルのガザ絶滅への動きの中、冬の嵐で半壊のビルが倒壊し、テントで凍え死ぬ子どもたちの様子が流れてきています。ガザの人たちは叫ぶことも、声を響かせることもなく、ただ弱り、疲れ果て、死んでいます。無条件降伏のハマスが人質を手放した今、イスラエルは「怖いもの知らず」となり、合意もどこ吹く風、ガザの自滅に向けて、ガザをじわじわと生き地獄にしているのです。

「停戦」から3ヶ月、トランプ政権の和平「第2段階」の開始宣言がありました。そのどこにもガザ市民の関与は書かれていません。それが「絵に描いた餅」であることを示すようにガザ全域への空爆、市民の殺害は激しくなっています。「平和と復興」という名の民族浄化と植民地化の中で、ガザの人々は取り残されています。そして忘れ去られ、歴史の中に埋もれていきます。

停戦「第1段階」―― ガザの人々の消耗を待つ封鎖「イエローライン」

ハマスは驚くべき速さで瓦礫の山から遺体を搜索して捕虜を返還し終えることができました。1万人の行方不明者を手作業で搜索している住民の見つめる目の中で、赤新月社の手を借りて、その思いは複雑であったはずです。それに引き換えイスラエルは、世界の沈黙の中で、停戦とは名ばかり、101日中、86日という停戦合意違反によって市民の命と生活を脅かし続けています。

停戦合意項目



✖ 攻撃の停止

- ◆1275件の合意違反 ◆479人の殉教者
- ◆1475人の負傷者

◎ イスラエル捕虜の解放

- ◆ハマスから生存者20名、遺体の27名の返還
- 1名の行方不明者を除き、全員を解放

✖ イスラエル軍の撤退

- ◆イエローラインで52%の土地を占拠、
- 少しずつ領土を広げ、62%に
- (撤退ではない！)

✖ 人道支援の再開

- ◆トラック搬入：約束の38%、燃料10%のみ
- ◆生存、復興に必要な物資の足止め

✖ ラファ検問所の再開

- ◆ハマスの停戦協定違反を理由に再開せず
- (誤解であると判明も変更せず)

停戦監視、人道支援、復興計画を担うはずの、アメリカが設立した「民間軍事調整センター」CMCC (Civil-Military Coordination Center) は、イスラエルの停戦合意違反に全く対応しませんでした。第1段階はガザへの人道支援の大幅増加が含まれていましたが、イスラエルが物資の流入を厳しく制限し続け、UNRWA、国際NGOも動きが停滞しています。ガザ住民は仮設テントや損壊した建物の中で、暖を取ることもできず、冬を生き延びるのに苦しんでいます。

ついに恐れていたことが現実になってしまいました。

5分の雨だけで海辺では洪水になりました。12月初めに9か月の赤ちゃん、Rahaf Abu Jazarが、南部ハーン・ユニスにある厳しい寒さのテントの中、一夜で亡くなりました。すでに20人以上の人が亡くなり、20軒の家屋が崩壊し、27000張のテントが水没しました。150万人の避難民を溺死や構造物の崩壊の危険に直接さらしています。これは天災ではありません。全インフラの破壊、再建の妨害による人災、ジェノサイドです。



続く飢餓 —— 子どもたちに十分な食料がありません。

ユニセフは急性栄養不良の5歳未満の子どもが約9300人確認されたと発表。急性栄養失調で9000人以上の子どもが入院しています。タンパク質、乳製品などの高いレベルの栄養がなく、失調と飢餓に直面しています。

- ・ 寒さで死ぬ。
- ・ 不衛生な環境で死ぬ。
- ・ 絶望して立ち去る(事をイスラエルに懇願する)



「第2段階」の目指すもの —— 停戦から非武装、官僚による統治、復興への移行

停戦「第2段階」 —— 「トランプの20項目の計画は、毒入りの聖杯だ。」

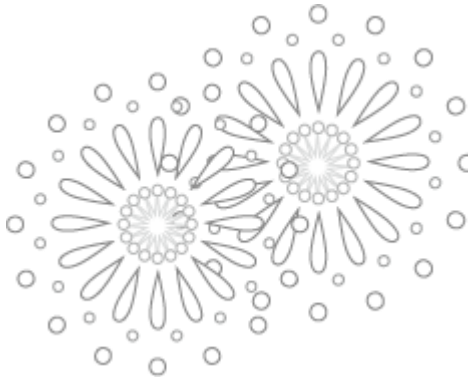
1月15日、米国が第2段階に進む発表の、まさにその時、イスラエルはガザ全域を攻撃し、少なくとも10人を殺害しました。この攻撃は、いつでも攻撃するというイスラエルの明確なメッセージでした。曖昧な合意文書は、イスラエルにとっては「永遠に戦争を続けるための白紙委任状」となっています。ネタニヤフ首相も、「ガザから撤退させるつもりはない」と明言しています。

20項目の文書の有効性にも疑問が出ている中、責任組織であったはずの「平和評議会」を、トランプ氏が国連安保理に替わる国際組織とする提案をし始めており、世界中に大きな混乱を生んでいます。「第2段階」の行方がますます見通せません。

ガザ行政委員会 NCAG (National Committee for the Administration of Gaza)

パレスチナ自治政府のアリ・シャアスが委員長に任命され、平和評議会の下で、ガザ地区の民政、救援、復興を監督する任務を負う15人の委員による非政治的な行政機関が正式に発足しました。しかしイスラエルは存在を認めず、ガザへの入域を拒んでいます。調整任務を担っているはずのCMCCにも動きがありません。西岸地区の自治政府のように、イスラエルの下請け機関になってしまうことが懸念されます。

「会議は踊る」 —— 「平和評議会」「行政委員会」など、トランプ氏とその取り巻きの動きはお祭り騒ぎで終わりそうです。それを尻目にイスラエルはガザ住民の絶滅に向けて一歩ずつジェノサイドを続けています。ガザの殉教者は少なくとも7万人という数字は出ていますが、68万人という推定数字も出ています。4人に1人が時間をかけて殺され続けているのです。それでも150万の住民が残っています。疲れ果て、生きる希望を失いかけています。それでも声を出し続けています。「私たちはみんな同じニンゲンだ」という神様からのメッセージを。世界の為政者、メディアは知りつつ沈黙を続けています。私たちは何もできません。でも多くのことができます。聴いて、共感することができます。



合言葉は・・・

世界中の爆弾をすべて花火にかえよう

12月8日の花火大会

仁川教会 土器屋香代子

毎年 8 月初旬に、信濃川の両岸を観覧席として開催される新潟県・長岡の大花火大会は有名ですが、長岡では 12 月 8 日にも花火が打ち上げられていることを今回初めて知りました。

長岡空襲の犠牲者を悼んで盛大に行われる 8 月初旬の花火大会とは違い、12 月 8 日の花火大会では戦争犠牲者への鎮魂と、世界平和への願いを込めた「白菊」と名付けられた真っ白の花火が 2 発打ち上げられるそうです。

この「白菊」を考案した花火師の嘉瀬 誠次さん(故人)は、太平洋戦争で出征し、シベリア抑留を経験された方です。生前、「白菊」を打ち上げる時、「戦友、見てくれよ」と心の中でささやくと言われていたそうです。

なぜ 12 月 8 日に花火を？

真珠湾攻撃をした 12 月 8 日は、「太平洋戦争 開戦の日」とされています。その「真珠湾攻撃」を指揮したのが、長岡出身の山本 五十六です。

しかし、この歴史を忘れかけている人が多くなり、この歴史を忘れず、悲劇を二度と繰り返さないために、太平洋戦争の開戦 70 年目を迎えた 2011 年から、毎年 12 月 8 日の開戦の日に、平和を願う 3 発の花火が打ち上げられるようになったそうです。

日米開戦の日に打ち上げられる花火には、3 つの願いが込められているそうです。

2 発の「白菊」は、1. 太平洋戦争犠牲者への鎮魂 2. 今なお続く戦争・テロの犠牲者への鎮魂、もう 1 発は世界平和への願いを込めた「金冠」だそうです。

花火「白菊」は長岡市とホノルル市を結ぶ懸け橋に

嘉瀬さんが考案した「白菊」は、長岡市とハワイ・ホノルル市を結ぶ懸け橋になりました。

空襲で 1489 人が犠牲になった長岡市は、歴史の理解を深めることが次世代の平和につながると考え、ホノルル市と 2007 年から交流を深めて来ました。

長岡花火の生みの親であり、育ての親でもあった嘉瀬さんは、花火を通して市民に希望と感動・誇りを与えていただいたと感謝されています。

戦友への思いを大切にしていた嘉瀬さんの気持ちを継いで、嘉瀬さんが遺した「世界中の爆弾をすべて花火にかえよう！」という言葉の花火師たちは合言葉にしているそうです。





シナピスホーム便り 番外編



事務局 やまだ なおこ 山田 直保子



みなさま、昨年はたくさんの方がカフェを訪問してくださり、本当にありがとうございました。2026年も心をこめて、難民移住者とともに、カフェを盛り上げていこうと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

今号では、シナピスホームで行われた新年のミサと集いの様子をお届けします。

このミサは、昨年秋からシナピスホームのシェルターで暮らす難民申請中の中国人一家5人が寂しい思いをしないよう、中国人の神父や仲間たちが計画したものです。その様子をご本人に報告していただきます。

～2026年1月1日 シナピスホームにて行われたミサの記録～

W.H

新年の初日に、私たちはシナピスホームで希望と温かさに満ちたミサに参加しました。シナピスホームは不安定な環境で暮らす私たちの家庭を支え、この集いを通して、信仰と具体的な行動で人を支える場所であることを実感しました。

ミサは新年の始まりに、天主への感謝を捧げ、新しい一年を委ねるために行われました。特に子どもたちの心理的安全に配慮し、共に祈り、交流することで、安全で温かく受け入れられる空間を作ることが目的でした。

ミサは陳神父と薛神父が司式しました。神父は「感謝と祈願」をテーマに過去一年の恵みを振り返り、新しい一年を天主に委ねよう導きました。家庭や子どもたち、シナピスホームの全メンバーのために祈り、困難の中でも守られ、導かれている希望を感じられる一年となるよう祝福されました。

ミサ後、私たちは信者と共に聖書の分かち合いを行い、家庭や日常で信仰をどう生かすかを話し合いました。また、中国語圏の共同体が今後どのようにシナピスホームや大正区のなみはや教会を支援できるかも議論されました。信者と協力して中国式餃子や羊肉スープなどを用意し、懐かしい味が心を和ませ距離を縮めました。

温かい雰囲気の中、子どもたちは自由に遊び、大人たちは輪になって語り合い、新年の希望を分かち合いながら、これまでの困難と支え合いを振り返りました。長期間緊張の中で生活してきた私たちにとって、この交流は貴重な休息であり慰めでした。

新年の初日、私たちは再び、シナピスホームが具体的で優しい形で家庭や子どもたちの必要に応えてくださったことを実感しました。ここは単なる典礼の場ではなく、受け入れられ、理解され、新たな力を得る場所です。感謝の心をもって、シナピスホームが新しい一年も私たちに寄り添い、より多くの人々を支え、天主の祝福のうちに豊かな実りを結ぶことを願っています。



中国語ミサの様子



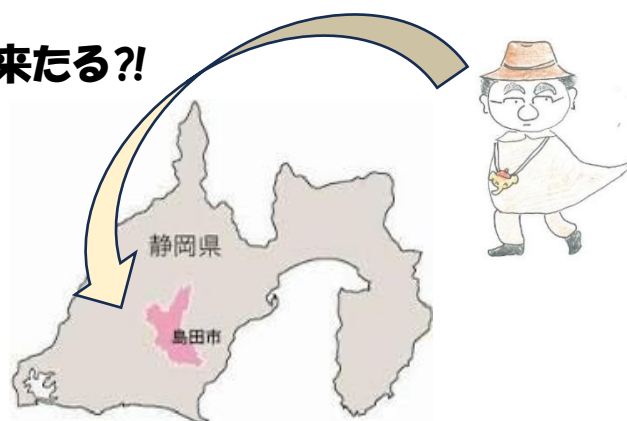
懐かしい中国の味がたくさん！
餃子、豚足の煮込み、羊肉スープ・・・

ちょっとほっこりおじゃま 笑うページにゃ福来たる?!

ことばを紡ぐ～言葉で遊ぶ

ペンネーム 「旅する象」

静岡県にある地方都市、島田市で 20 年以上
続いている公募のコンテストがある。



その名を『愛するあなたへの悪口コンテスト』と言う。

趣旨としては、本当は愛しているのについ言ってしまう悪口、愛のこもった悪口の言葉を募集するというもの。

審査員長には、直木賞作家の^{むらまつともみ}村松友視氏を配し、市を挙げたイベントになっているようだ。応募の形式は自由(詩・短歌・俳句・川柳等)だが日本語で 50 文字以内という制限がある。ピンと来ない方も多いと思うので、過年度の受賞作を幾つか紹介しておこう。

【**だとしても ここまで来たら 添い遂げる**】 去年の応募 5706 点の頂点、大賞受賞作だ。「だとしても」という意表を突く切り出し方、ここまで来たらで、長年連れ添った間に起きたであろう様々な葛藤を想像させ、最後の「添い遂げる」の 5 文字で愛情と決意を現した傑作だ。かと思えば

【**失敗をすべて卵でとじる母**】【**思い出したように痩せようとする母**】等の母に対する愛情と可笑しさを詠んだ、子どもからの応募作品も入賞を果たしている。

妻から夫への言葉は短文ながらも^{かいぎやく}ピリリと諧謔味の効いた作品が多い。

【**人の字の短い方が貴方なの**】妻をもっと支えろということなのか、立てろということか。

【**百均の 200 円商品のようなうちの人**】その他大勢の中では、少しは目立つということか。よくわからないが、言われると少し褒められているような気にもなるから不思議な言葉だ。私の好きな作品として【**理想とはちょっと違うが妻である**】を挙げておこう。

自分の望んでいた理想的な女性とは言えないが、妻であると言い切って誇らしげに見える。愛する家族や大切な人に面と向かっては言えないが、気になっている部分も伝えて、これからも仲良く生きていこうという思いが、短い言葉に乗っている作品を読むと嬉しくなる。

私もひとつ披露しておこう。

【**結局、男は甲斐性よね。お小遣い制のあなたに言うのも酷だけど。ごはん出来たわよ。**】 そこに愛はあるんか！……お後がよろしいようで。

❁ 釜ヶ崎の夜廻り、炊き出しボランティア

釜ヶ崎にある「ふるさとの家」のミサに行くと、炊き出しや夜廻りボランティアに参加した若者たちによく出会います。年末にはベトナム人留学生たち、お正月の時は上智福岡高校、1月中旬は広島学院の高校生たちがミサにあずかっていました。そんな時にはミサの後に本田神父さんが「今日来てくれた皆さん、一言どうぞ」と必ず声をかけます。高校生たちは急にマイクを向けられても物怖じせずに短い言葉で思いを語るのです。

その直球の言葉に私たちはいつも感心し、熱い気持ちになり誰もが惜しみなく拍手します。この温かさが好きです。

広島学院高校の生徒：

「今回、釜ヶ崎に来て、自分がどんなに大きな偏見を持っているのか、気づかされました。」

本田神父：

「そうだね。私たちみんな、偏見を持っているね。そう言ってくると、私たちもまた、偏見に満ちていた最初のころを思い出させてもらえる。みんな自分の偏見に気づくところから出発する。」



「ふるさとの家」は、高齢日雇労働者のくつろぎの場。サービスをする側にではなく、サービスを受けなければならない側に主はおられる。

聖フランシスコ会

大阪市西成区萩之茶屋 3-1-10

❁ シナピスの仲間がレスリングの全日本大会でチャンピオンになりました！

シナピスの仲間、サイドさんが、全日本マスターズレスリング選手権大会 70 キロ級で見事に優勝しました。サイドさんにはスポンサーがありません。全て自力で練習し、実践を重ね、とうとう栄冠を勝ち取りました。

サイドさんの応援スポンサー、ただいま募集中！

☎06-6941-4999 ご連絡お待ちしております！



▲尾崎野乃香のコーチとして高評価を得た栗森幸次郎 (KURIMORI FILM)。準決勝でイランの強豪、サイド・サレヒ(松阪クラブ)と激突して3位

サイドさんの言葉

私は日本一になることができました。

ですが、イランで起きている悲劇のために、私はこの勝利を喜ぶことができませんでした。表彰台にはイランの旧国旗を持って上がりました。



活動へのご支援ご協力を
よろしくお願いいたします。



ご寄付をお願いします！

お米、カップ麺が不足しています。

お電話をお待ちしています！！

☎06-6941-4999



シナピスホーム（カフェ）
2月の予定

ランチ：21日

★土曜日の11時頃～16時頃

★ランチは要予約

☎ 080-8940-8847

カフェ：7、14、28日

★土曜日の13時頃～16時頃

公式ライン・フェイスブック・HP



公式ラインはこちらから

<https://lin.ee/hlNnRd6>



Facebookはこちらから

<https://www.facebook.com/profile.php?id=61577353826677>



HPはこちらから

<https://sinapis.osaka.catholic.jp/>

「ニュースレター配布停止」、
「点訳版の郵送」をご希望の方は
シナピスにご連絡ください。

☎06-6942-1784

あとがき

1月17日、たかとり教会で行われた阪神淡路大震災追悼のつどいに参加しました。宗派を超えて集まれた僧侶の方々が十数人。中には山伏の方もおられ、開式を告げる法螺貝を吹いてくださいました。キリスト教からは参加しておられたのは、カトリックの司祭お二人だけで、「もっとたくさんの司祭や信徒の方々が参加して下さったらいのに」と考えてしまいました。時間が早すぎて参加するのは難しいのですが、被災と復興の象徴的な場所であるたかとり教会で、あの時、暗くて寒いなかで、みんなが助け合ったことを思い出し、「忘れない」「助け合ったことを伝えていこう」と胸に刻むのは大切なことではないかと思ったのです。（おかだ）

▽▲▽ シナピスの主な活動 ▽▲▽

◆広報活動

- ・教皇メッセージ、司教団メッセージ等社会活動の指針の伝達
- ・読者と教会内外の社会活動をつなぐ機関誌としてシナピスニュースを発行

◆大阪高松教区・社会活動委員会との連携

◆学習会研修会の企画

◆こども基金

世界・日本のこどもたちへの援助

◆日本カトリック司教協議会との連携

正義と平和協議会、難民移住移動者委員会、カリタス、部落差別人権委員会に委員を派遣

◆人権教育の講師を務めるなど教育機関への働きかけ

◆難民移住移動者支援

難民移住移動者の暮らしやすい社会を目指して

難民移住移動者 相談ダイヤル

☎ 06-6941-4999

アクセス

〒540-0004 大阪市中央区玉造 2-24-22

カトリック大阪高松大司教区事務局内



●公共交通機関ご利用の場合

JR 森ノ宮駅より 約 1000m

地下鉄中央線森ノ宮2番出口より 約 800m

JR 玉造駅より 約 1000m

地下鉄長堀鶴見緑地線玉造1番出口より約 800m

●車でお越しの場合

阪神高速 13号東大阪線法円坂出口
法円坂交差点南へ上町を東へ

活動へのご支援ご協力をおねがいします

☐郵便振替 00960-7-61419

加入者名 カトリック大阪高松大司教区

代表役員 前田万葉

☐三井住友銀行 玉造支店 普通 9401958

カトリック大阪高松大司教区 シナピス

代表役員 前田万葉

☐オンラインはこちら →→→

